

豪雪地帯として知られる新潟県南魚沼地域を事例に、家屋の構造と、雪による事故との関連、また雪国に暮らす人々の雪に対する意識の変化について明らかにするという目的を達成するために、①家屋の屋根の種類と分布の調査、②南魚沼地域における、近年の雪による人身事故の種類と原因についての分析、③聞き取り調査を行った。

その結果、次のようなことがわかった。

- 屋根の分布は、自然落下方式と人力雪下ろし方式の屋根が8割弱を占め、その他の融雪方式はあまり普及していない。それぞれの方式に、生活への異なった制約があり、それを考慮して、雪国の人は自分の家の屋根の方式を選択している。
- 屋根雪処理中に屋根から転落して負傷する事故や、屋根からの落雪による事故が目立ち、近年の自然落下方式の普及や、住居の周りの消雪システムの発展による、負の影響が考えられる。
- 冬でも雪を意識せず生活できるようになり、生活が楽になった面もあるが、雪に対して受動的な生活から、雪に対処する生活となり、生活の中で除雪にかかる時間や費用は大幅に増大した。雪国に暮らす人々は、不便であるが面白みを持つ、雪国の生活の複雑さを理解している。

江戸期における「遊廓」の社会空間： 歌舞伎における「遊廓」の空間表象を通して 村上 友望

遊廓は公娼制度によって誕生し、一定の区域内に遊女を集娼した空間で、昭和半ばまで存続した空間であった。

本論文では、遊廓の対象を江戸時代の江戸の吉原遊廓に焦点をあて、都市における遊廓の社会空間というものを考察する。

江戸時代初期、江戸という新たな土地に都市を形成する上で、遊廓が設置されたが、のちに江戸の

周縁地域へと移動させられ、この周縁地域と遊廓の閉鎖的性格が、遊廓をより非日常的空間へと導いた。こうした背景や特色、また、遊廓内の組織などを踏まえて、遊廓がどのような社会空間であったのかを考察する。そして、一考察方法として「歌舞伎」というメディアを使用する。そもそも、「遊廓」と「歌舞伎」は江戸時代、幕府の封建制度によって世間的に「悪所」とみなされていたという共通した性格があることや、また現在でも当時の文化を伝承し、再現するという特色を利用する。

また、考察する上で問題になってくるのが「ジェンダー」である。遊廓は、封建社会において、男性によって男性のために作られた空間であり、また遊廓内も女性の空間のように見えて、当時の家父長制の影響を受け、男性によって支配されている空間であったといえる。その遊廓を歌舞伎演目として描く際に、劇作家も男性であるという、遊廓は常に男性支配によって存在していた。

また、遊廓は、遊興費が高く、庶民には立ち入ることが出来ない空間であった。そこで、男性庶民が利用する岡場所と遊廓を比較したり、当時の社会を反映した歌舞伎演目を通して、庶民との関係を考察する。

江戸期の遊廓は、当時の社会的背景や都市の中で周縁という場所性がより閉鎖的な空間であったといえる。しかし、閉鎖的でありながらも存続し続けたのは、都市という中で「遊廓」が問題視されることがなかったことである。本論文では、その背景などを通して遊廓の社会空間を考察する。